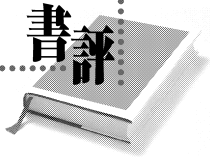


書評



小濱啓次 編著

救急マニュアル (第3版)

救急初療から救命処置まで

益子邦洋

救急医療における道しるべとなる良書

川崎医科大学名誉教授として、現在も救急医療の最前線で活躍しておられる小濱啓次先生の編著による「救急マニュアルー救急初療から救命処置まで」が初版から22年を経てこのたび大改訂された。この間の救急医学の進歩には目を見張るものがあり、数多くの新知見を随所に盛り込んだ最新作が世に出されたわけである。

小濱教授はわが国で最初の救急医学講座教授であり、それまでわが国の医学医療の中でまったくと言ってよいほど省みられることのなかった救急医学の学問体系を構築し、救急医のアイデンティティ確立に尽力されてこられた。その意味では、本書の第1版はまさに救急医学のスピリットをふんだんに盛り込んだ名著であり、救命救急センターや救急部で働く若手医師にとってのバイブルであったとも言えよう。従来の各科対応型救急医療では対応できない重度外傷、広範囲熱傷、急性中毒、心肺停止、多臓器不全の患者を前に、手探りでスタートしたわが国の救急医療において、まさに道しるべの役割を果たしてきた。筆者が救命救急センターに配属となり、次から次へと搬送されてくる各種病態の患者対応に苦慮したとき、貪るようにして本書から情報を得ていたことが昨日のこのように思い出される。

手垢で真っ黒になった第1版と、今回の改訂版を2つ並べてみると、300頁の増加という単なるボリュームのみならず、その情報量の増加に驚かされる。編著者が初版の序でも述べているが、「救急疾患を救急医学の視点で捉え、その病態を十分理解して診断・治療に望め」とのメッセージが、第3版にも脈々と受け継がれていることが容易に見て取れる。すなわち本書は単なる「マニュアル」ではなく、教科書として

の重厚さと、マニュアルとしての利便性をともに兼ね備えている。

平成16年度からスタートした救急部門の臨床研修必修化にも十分配慮して、救急外来(ER)で遭遇する各種症状や common disease への対応について、分量を大幅に増やして記述しているのが大きな特徴であり、各所に「メモ」や「ER小講義」を配して、若手医師の理解を助ける工夫がなされていることも有難い。また、小児および成人の各種皮膚疾患、重症感染症、気管支および消化管内視鏡所見などが口絵カラーとして掲載されており、ER診療の大きな助けとなっている。

執筆陣は小濱教授をはじめ、氏とともに日夜救急医療を戦い続けてきた、同志の諸先生であり、救急のエキスパートである。その意味で本書は「小濱救急医学」と呼ぶこともできよう。

医学医療は日進月歩であり、この第3版が世に出てまもなく、2005年11月に国際蘇生連絡協議会(International Liaison Committee on Resuscitation; ILCOR)が「心肺蘇生に関わる科学的根拠と治療勧告コンセンサス(International Consensus on ECC & CPR Science with Treatment Recommendations; CoSTR)」を発表した。これを受けて、わが国でも新しい心肺蘇生ガイドラインが策定され、2006年7月に『救急蘇生法の指針』が発刊された。

本書が永遠にわが国の救急医学のバイブルであり続けるために、できるだけ早い機会にマイナーチェンジしていただきたいと願わずにはいられない。

(日本医科大学千葉北総病院救命救急センター)

●B5 1,032頁 2005 定価17,850円(本体17,000円+税5%) 医学書院